

私の夏の思い出は、パパといっしょにわなにかかった、いのししをとったことです。なぜこのことを書くかというと、少年の主張作文にも、これと少しちがうのを書いたし、あまり体験できないから、これを書こうと思いました。

りょうをする道具を準備して山の中に入りました。スプレー、スコップ、銃などを持ちました。登つたらずぐに、いのししが見えました。すぐに銃をかまえて一発うちました。玉は頭にはあたらずにせなかにかすりました。二発目は頭にあたりました。そのいのししは、スプレーで数字をかきオスカメスの記号を書きました。スコップでまわりにちらばった土を少しだけ整えていたので、

「なんでそんなことするの。」と聞くと、

「次、わなをしかける時に、あばれたあとがあると、いのししがかからないからな。」と教えてくれました。私もパパと同じりょう師になるために勉強したいです。いのししをつれて昔いた家にいきました。入れ物に水をためてまだやわらかい肉をひやして、かたくしてさばきやすくしました。さばく手伝いはひさしぶりだったけど「やるぞ。」という気持ちはありました。両方の手もち、切りやすいように広げたりしました。

他にも、ひっぱったり、すべらないように止めたり、いろいろなことをやりました。でもやっていてむずかしかったことは、次にきる所を予想して、手足をおしたり、ひいたりすることがむずかしかったです。でも、さばくやり方はおぼえています。でも、皮を取るのにはパパに任せたいです。

最後にいのししの体をあらって食べられるところは、切って保存して、いらない食べられないところは、山にはいって、たぬきやくまなどに食べさせました。

これからも、いのししの取る所やさばくのをいっしょにやって、私が大きくなって、りょう師のめんきよをとったら、いっしょにいのししなどを取りたいです。